

豊口山の植物採集

伊藤 文男

長野県植物研究会の例会を、昭和54年8月25・26日に長野県の南部・下伊那郡大鹿村豊口山(2231m)において行なわれた。参加者は清水建美、奥原弘人、馬場多久男、中村英夫、清沢晴親、堀米富平、平林陸男、斎藤定美、古松隆明、下平洋雄、堤久の諸氏と幹事の伊藤が参加した。

豊口山は赤石山脈の連峰の支脈に位置し、小渋川沿いの大鹿村釜沢部落の北東にそびえ立っている。この山の地域の地質は中生代の初期に海底で堆積した泥岩やチャート及び、石灰岩などで形成されている地層で秩父帯とよんでいる。登山道の両側の原生林は殆んど伐木され、スギ、ヒノキ、カラマツの植林が行なわれている代償植生地である。今回は長野県植物誌作成のための調査の一環として植物を観察することにした。

第1日(8月25日)曇天から雨の天候となり、採集会の実施が心配されて中止したらどうか、と意見が出たが、予定通り決行することにした。奥原先生は午前中に大鹿入りをして鹿塩の採集調査を実施し、清沢、馬場田先生は大河原市場から釜沢まで雨の中を採集を行なって釜沢荒川荘に到着された。大部分の会員の集合は午後6時30分頃であった。夕食時には自己紹介を行い、多少のアルコールも入る。清水先生は悪天候の影響を受けて少し遅れ午後9時30分に到着された。夜は奥原先生よりエゾハタザオ(おそらく南限の分布)、リュウノウギク、ハナビガヤ、キダチネズミガヤ、ノカンゾウ、ツルキジムシロ、タイアザミを始めとして多くの植物の分布について説明をうけて、学習しあった。また清水先生からは学生時代の調査の思い出など話されて、なごやかなムードであった。(第1日目、伊藤出席出来なかったので古松先生の報告より)

第2日(8月26日)心配していた雨は夜半にやみ、天気は回復に向い夜明け方には宵空が見え初める。午前6時30分までに堀米先生、平林先生、伊藤が荒川荘に到着。一同12名は6台の自家用車に分乗して午前7時に荒川荘を出発して採集調査地に向う。釜沢部落の住宅地を過ぎて吉野朝時代に宗良親王が在住された遺跡の地である御所平(1130m)に到着する。遺跡の碑のある傍に貯木場跡の広場がある。此処に駐車して、身仕度を整えて、徒歩で採集しながら

豊口山の山頂に向う。御所平の路傍には下伊那では分布の稀なオオブタクサが侵入帰化しているのを見る。またキビナワシロイチゴを清水、奥原両先生が最初に確認された。本種は下伊那で最初の発見である。広葉樹の樹上にはヤドリギが多い。道路沿いにはミズナラ林が伐採され、スギ、ヒノキなどが植林されている代償植生地である。エゾハタザオが多い。フタリスズカ、ホソエカエデ、クマノミズキ、をみる。一行は川辺に出る。山道はここから急斜面になっている。伐木後の計画で植林されたヒノキは高さ2m程度の幼木である。海拔1200mになるとミツバツツジが稀となりトウゴクミツバツツジが多く見られる。シオジ、ユクノキ、イワトラノオ、オニムラサキ、ハウチワカエデ、ブナ、オオモミジ、フジアザミが目立つ。この辺から山梨、長野県に特産するスグリが所々に見られる。ハナビゼリも多い。海拔1400m以上に登るとニッコウナツグミ、ジャコウソウ、イワガネゼンマイ、ミヤマクロモジ、ミヤマイラクサ、クロカンバ、ハリモミ、レンゲショウマ、サナギイチゴ、ミヤマアキノノゲシが見られ、ソバナに自花品の多いのが目につく。海拔1500m附近から道はやや緩やかになる。モトゲイタヤ、アズマガヤ、メグスリノキをみる。この辺からカラマツ植林地となる。1600m以上の地点ではマネキグサ、ヤマヒメワラビ、シウリザクラ、ミヤマホソエアザミ、1750mの地点で石灰岩の岩壁の場所に出る。此处で昼食にする。岩壁とその附近に見られる植物はシャクジョソウ、ミヤマホソエノアザミ、クモマナズナ、トダイハハコ、ミヤマモジズリ、ヒロハヘビノボラス、イワウサギシダ、ホザキイチョウラン、石灰岩特産のイチョウシダなど疲れを忘れて観察する。清水先生がヒメイワトラノオ、イナデンダの珍品を確認する。帰路は各自のマイペースで下山して御所平に集合した。午後5時30分。天候に恵まれて楽しい採集会を終えて解散する。

出現した種類で前記のものを除いて一部を下記に附記しておく。チョウセンゴシシ、チョウジザクラ、クサコアカソ、オノオレカンバ、ユクノキ、イワトラノオ、ナガバノコウヤボウキ、オオウラジロノキ、ミヤマイラクサ、アサダ、キハサイカリソウ、トモエシオガマ、ノサウド、タカネイバラ、コカラマツ、イワシモツケ、ミヤマウイキョウ、ミヤマネズ。